研究論文

附属幼稚園実習の可能性（２）

小　田　進　一・髙　橋　雅　子*

Future possibilities of Hokkaido Bunkyo College's kindergarten observation（2）

ODA Shinichi and TAKAHASHI Masako

Abstract: Before commencing their specialized study, our students observe the classroom activities of Hokkaido Bunkyo College's kindergarten. The students do not participate in the lesson and they are not directly involved with the kindergarten students. Because of this, the students do not feel that this class observation is a good experience. Due to the introduction of the college students to the classroom, the kindergarten teachers have changed their methods for including the college students. The college students feel that this has greatly improved the observation portion of their course. I would now like to discuss further the possibilities of these observation periods.

Ⅰはじめに

入学の早い時期に保育の現場を見学し、その後の学習意欲喚起を目的に取り組んでいる１年次の附属幼稚園における観察実習が、生活体験に乏しく、子どもと触れた経験の少ない今日の学生の実態に沿ったものなのか、学生の実情に応じた学習になっているのか、学生の保育職に取り組む意識を高めることにかかわる内容になっているのかの課題意識により取り組んでいる研究の２報である。一昨年の研究は、同様の意識のもとに取り組んだ附属幼稚園の指導内容の検討を基にした学生の育ちの断片を考察した。すなわち、５月６月という入学間もない時期にもかかわらず学生自身の学びの実感を記録中に認めたことを、実習日誌の記述を考察することにより明らかにしようというものであった。さらに、附属幼稚園における意図的な指導内容と学生が実感した積極的、あるいは自己肯定的な学びとの関係を探ることにより、附属幼稚園での良い印象=プラスの学びが、以後の学習意欲への良い影響を与えるものであったとの印象を得た。

保育は元来「煩わしい人間関係」をこそ対象にする。自己肯定感に課題を持ち生活体験や実体験の乏しいといわれる若者には人間関係をはじめとし多くの困難が予測されるのだが、４日間という短期間に彼らを受容し、従来の「指導」や「指摘」とは異なる関わりを工夫することにより、気づきや学びが意識され、そこからさらに保育職へのインセンティブが高まり得ると予感させるものであった。今後については、年間を通じた学生の学びや長期の実習への影響についてを次に取り組むべき課題としていた。

本稿は、一昨年度の研究時において学生を附属幼稚園において直接指導してきた附属幼稚園主任教諭が、短期大学部非常勤講師として「幼稚園教育実習の研究」担当することになったことにより、これまでの附属幼稚園での指導内容を、本短期大学部の演習の中で取り組み、その結果について考察することにより、学生の学びの実情について確認しようとするものである。さらに短大と幼稚園との連携を視野に、その課題についても検討した。

北海道文教大学短期大学部幼児保育学科
*北海道文教大学短期大学部幼児保育学科 非常勤講師

Ⅱ　研究の目的と方法

これまでの研究では、実習日誌中の実感の伴う記述から以下の項目を抽出した。

表１　実習日誌のまとめ（2007）

①保育者の役割	保育者は、「子どもの世話をする」「何でもしてあげる」といったイメージを持っていた学生が多かったが、観察により、「援助する保育者」の役割に気づくことができ、その必要性について理解を深め、子どもと関わることができる数少ない場面の中で、実践してみようと努力する姿もみとめられた。
②子どもへの関心	幼児は、できることが少ない、騒がしい、泣くことが多い等のイメージで、実習に臨んだ学生も多かったが、「考えていたよりも、ずっと大人だった」、挨拶や、お礼の言葉がきちんと身についている、友達を思いやるなどの理解に至り、「自分たちが子どもから学ばなくてはならない」との自覚的な姿勢も認められた。
③保育への関心	現場の保育者による保育を、「すごいと思った」「そのような保育者になりたいと思った」など目標としたい保育に出会ったことにより、進路目標が明確となった。
④観察実習の意義	子どもとの関わりが制限されている辛さと葛藤しながらも、観察に徹することができる４日間の意義を認識し、より深い観察をしようと、努力する姿が認められた。
⑤意欲	「やり方がとても参考になった」「そのような保育者になりたいと思った」と感じることにより進路目標が明確となり、「先生になりたい気持ちが強くなった」と姿勢が明確になった。
⑥喜び	子どもたちとの生活の中で、いかに喜びを感じられるかが保育者にとっての必要不可欠な資質である。まだ、充分な知識のない学生であっても観察の中で、子どもを通しての喜びを経験し得ている。
⑦その他	一見単純な発見、学びのように見えながら、背景にある保育の本質に触れる内容への気付きのある体験になっている。

これらを、１「観察の意義と学びの実感」、２「援助者としての教師、教えながら教える保育」３「子ども受容」の3項目に整理し、Ａ：附属幼稚園での指導の内容を「幼稚園教育実習の研究」に反映し、授業の中で特に取り組んだ内容をまとめるとともに、Ｂ：学生への質問紙調査を行なった。

授業への反映は、「附属幼稚園見学実習に備えて」として４回目の講義（平成20年５月７日）に１「観察の意義と学びの実感」を中心に、他の項目については、下記の授業を中心に講義を行った。（２「援助者としての教師、教えながら教える保育について」３「こども受容について」については、保育の支柱として必要不可欠なものであるので、すべての講義における土台として取り扱っている。

従って附属幼稚園観察実習における事前事後実習の意味も持っている。）

前期11回（６/25）　子どもについての理解を深めよう①幼児期の特性について

12回（７/２）　〃

②子どもの“学び”について

13回（７/９）　〃

③“自立する”とは

後期13回（12/10）　保育者に求められるものとは

質問紙調査は、１年生全員が幼稚園での観察実習を終えた12月に行った。全１年生60名を対象とした。

質問項目は以下である。

表２　調査項目

１「観察と意義と学びの実感」	観察実習理解、記録することの理解、観察ポイント理解 観察意欲、取り組みの姿勢 (感動体験の有無)
２「援助者としての教師、教えながら教える保育」	教師の援助への理解、子どもの関与方法の理解、 教師の環境整備の重要性理解、子どもの意思を生かして指導する姿勢、子どもと積極的に関わる姿勢
３「子ども受容について」	子ども受容の理解、子どもが受容を求めていることの理解、 信頼関係は受容によることへの理解、子どもを受容する姿勢

Ⅲ　教育実習研究Ⅰにおける附属幼稚園実習指導の反映

１.「附属幼稚園見学実習に備えて」の講義内容について

１）授業計画に組み込んだ理由

昨年までの、附属幼稚園側として実習生を受け入れる立場による経験の中で、早い時期の実習生に、下記について、理解不足、戸惑いなどが多く見られた。

・観察実習であることの意義（保育における観察の重要性に対する理解）

・実習日誌の書き方、及び、実習日誌を書く必要性について

・保育　＝　援助　という視点

一方、学生の実感を受け止め、具体的なやり取りを工夫することにより、早い時期の学生にも学びがあることも分かった。幼稚園での指導を、短大の授業の中で取り組むことにより、学生自身が見通しを持って実習ができ、また、附属幼稚園の体験がその後の学習に生かされることを意図して、附属幼稚園実習開始直前に、「附属幼稚園実習に備えて」というテーマで授業を行うとともに、１「観察の意義と学びの実感」、２「援助者としての教師、教えながら教える保育」、３「子ども受容について」を意識して講義に取り組んだ。

２）授業の内容

１.「観察実習の意義と学びの実感」

①附属幼稚園の概要

園児、職員の構成、クラス編成などについて、また、一日の生活の流れについて（詳細については、実習オリエンテーション時に、附属幼稚園の担当者より説明）

②実習の内容

基本的には、子どもとは関わらない観衆者的観察による観察実習を行い、その観察に基づき、日誌の記入を行う。

③観察実習の意義

援助者として保育を行うには、観察は必要不可欠な要素であり、また、観察に徹することができるこの実習は､学生としても、保育者としても数少ない貴重な機会であることなどを認識し、この実習での観察の経験が、２年次の学外実習や卒業後保育者として保育を行う際「常に観察者である保育者」であるための基礎的な力の土台へと繋がっていくことを認識する。

④附属幼稚園での観察実習について

ⅰ観察のしかた

・活動の妨げとならないよう、子どもたちの動線に配慮した場所で観察し、また、子どもたちの生活空間の雰囲気を大切にするた

め、実習生自身の雰囲気、存在感、圧迫感などにも、充分に配慮する。

・子どもからの実習生への関わりには、必要最小限の受容はあり得るが、実習生から子どもへの関わりは一切行わない（けんかなどのトラブルの場合も、観察者に徹する。ただし、危険が伴う場合は例外である）。

ii 観察のポイント

・表面的な観察（子どもや保育者が何をしているのかなど）から、それがどのように行われているのか、子どもや保育者の姿から、それが何を意味するのか、保育において大切なことは何かなど、一歩踏み込んで、考えながら、観察を深めていくようにする。

・観察になれてきたら、目の前で展開されていることを追うのみではなく、ねらいを設定し、意識的な観察も行ってみる。

iii 記録のとり方

・園によっては、保育時間中のメモを禁止しているところもあることを認識し、メモの取り方には、充分に配慮する。（子どもに、観察されていることを意識させないように心がける。ポケットに納まるくらいの小さなノートを用意し、必要事項を、簡潔に書きとめるようにする、など）。

iv 実習日誌について

a　日誌を書く必要性について

保育における記録の重要性について知り、今回の実習での経験が、２年次での学外実習、そして保育者としての「保育の記録」に繋がっていく土台となることを認識する。

客観的記録（子どもの生活や保育者の援助）と主観的記録（実習生の思い）などを書くことが、保育への理解を深めたり、課題などを明確にするための、重要な手段となることを認識する。

b　書き方について

・各項目とその内容

指定の日誌用紙の項目ごとに、その記載内容を確認

・記入の実際

本学学生（卒業生）が書いた実際の日誌、また、一般的な観察実習の日誌のサンプルを見ることにより、具体的なイメージをつかむ。

・留意点

実習日誌記入時の、一般的な留意点、注意点について確認（時系列に沿って記入する、字の大きさ・誤字・脱字に気をつける、園児の実名記入については園に確認する、提出期限を守る、社会人としての表現を心がける、など）

v その他留意事項

附属幼稚園といえども、社会と繋がっている保育の現場であることを認識し、きちんとした意識、態度で実習に臨むように心がける。観察実習を行うのは学生であるが、実は学生の方が、子どもたちから観察され、モデルとされていることを認識し、実習生といえども、保育に関わる大人としての責任の大きさを自覚するようにする。

２．「援助者としての教師、教えながら教える保育について」

①「保育＝自立への援助」であることを認識する

子どもが一人でできるようになるには、どんな援助が必要か考え、具体的な援助の方法、及び、環境構成について熟慮し、工夫、努力をする。

②観察に基づく、「この子に今、必要な援助」を提供する

具体例～ボタンができない子どもへの観察の視点

(1) ボタンの仕組みが理解できているか

(2) ボタンを、ボタンホールに入れることができているか

(3) ボタンをボタンホールから引き出す

ことができているか

(4)“(2)(3)”を行う指先の機能の準備ができているか

(1)から(4)のそれぞれの段階により、教師のアプローチの仕方は異なってくる。

③幼児期は「厳粛な生命の法則」に支配されている時代であることを認識する

子どもが、自分で成し遂げなければならない、発達のために「自然から課されている宿題」を大人が知り（科学的根拠や観察を通して）、より良く成し遂げられるように援助する。

④「教えながら教える」保育について

幼児期は、動きながら学びとる時期であることを認識し、子ども自身が、意識して、正確に、繰り返し行えるための環境づくり、援助を行う。

その際、訂正や否定しながら教えるのではなく、子どもが興味を持てるように工夫し、正しく伝えながら『教えながら教える』ことが大切である。

『教えながら教える』具体例

・テーブルを拭いている子どもに「ここが、まだ汚れているよ」→「ここを拭いたら、全部きれいになるね」

・「廊下を走ってはいけません」→「廊下は、歩きましょうね」

3.「こども受容について」

①子どもが、安心して生活をし、自立への道を歩むためには、信頼できる大人の存在が不可欠であること、また、保育者は、子ども（保護者にとっても）が初めて出会う先生であり、この出会いが、子どもの生涯にわたる影響を及ぼし得るということを認識する。

②前項を踏まえ、保育者が個人としての感情を優先するのではなく、いかなる時も、専門職として、子どもの気持ちを受けとめ、寄り添い、子どもに信頼される大人として、適切な援助を行うように努力することが求められる。

Ⅳ　調査結果と考察

附属幼稚園実習日誌から、実感の伴った有効な学びと評価できる内容を整理した項目について、その理解度と学生自身の姿勢態度を問うた。従って、「良く分かった」「感じた」「できた」「思った」の肯定的回答とその他「分からなかった」「どちらともいえない」の否定的回答、回答不能を否定的回答として分類し、肯定的回答について結果を考察した。

表３　調査の単純集計

項目	肯定的回答	否定的回答	回答不能
観察実習理解	５２	３	１
記録することの理解	４１	８	４
観察ポイント理解	３９	９	８
観察意欲	３６	６	１４
取り組みの姿勢	２５	２０	１１
教師の援助への理解	５０	５	１
子どもの関与方法への理解	４６	３	７
環境整備の重要性理解	５２	２	３
子どもの意思を生かして指導する姿勢	３７	１１	８
子どもと関わる（ことができた）姿勢	４４	４	８
子ども受容への理解	５１	３	２
子どもが受容を求めていることへの理解	４９	４	３
信頼関係は受容によることへの理解	４８	２	５
子どもを受容する姿勢	５４	１	１

（名）

1.「観察と意義と学びの実感」

附属幼稚園での４日間の観察実習については良く理解されていると思っている。しかし、その具体的な展開になると、記録すること、実際に何を記録するか（観察のポイント理解）と肯定的回答

は漸減しておる。これは、具体的な実習のねらいを持って実習に臨むことの困難な附属幼稚園実習の実態を表している。観察実習の中で具体的に手応えを得たものは更に少なくはなるが（表４）、観察することで感じた喜びで、学生による子どもの発見とでもいえるような手応えが、そのほとんどを占めているように、学生の心を揺さぶる体験となったのだとすれば、64％と半数以上のものが意欲的な参加姿勢だったと評価できるだろう。これは、表10体験後のアピールに、観察実習による学びについての意見が寄せられた意見の半数以上と多く寄せられていることにも表れている。また、気を入れて参加したからこそ得られる「感動体験」は、学生の予想していなかった子どもの姿に触れたことと予想されるが、幼児による気配りや子ども同士の育ち合い、助け合い（表６）が挙げられている。

表４「観察と意義と学びの実感」

項目	肯定的回答
観察実習理解	９３
記録することの理解	７３
観察ポイント理解	７０
観察意欲	６４
取り組みの姿勢 (感動体験の有無)	４５

（％）

表５積極的な観察を実感したこと（観察の喜び）自由記述

項目	内容
①子どもの姿に触れ知ることができた	会話から、発想の豊かさ、優しい気持ちがわかった。（２）、子どもの実際の生活が知れて（２）、細かな点を観察できた。（３）、子ども集団や年齢に応じての遊び（２）、３才が意外に何でもできる。授業で習ったこと子どもの姿が実際に見ることができた。（３）、子どもの素直な育ち（２）日々の成長（２）日々の流れ、子どもの笑顔、行動を見て気持ちがわかった（２）見えにくいところでいろいろな仕草や行動をしている。（３）
②記録	途中から記録の仕方が分からなくなった。記録の要領が分かった
③教師の姿	言葉がけなど教師の指導の仕方が分かった。（２）子どもとの接し方など客観的に見る大切さ（３）

表６積極的に関わることによる感動場面　自由記述

・ 幼児による気配り、譲り合い、助け合い　実習生への優しさ（１０）
・ 障害児への幼児による援助（１０）
・ 子どもたちの仲直りする過程幼児同士の気づき，指摘し合い、子どもたちだけで物事を進めていた（７）
・ 言葉がけ一つでの幼児の変化、表現の率直さ、幼児からの作品のプレゼント

２.「援助者としての教師、教えながら教える保育」

子どもの主体性を育てる保育の実践者としての保育者の在り方についての理解は、表７のように非常によく理解していると学生たちには思われている。ではあるが、具体的に自分自身の事になると、できなくなったり、わからなくなってしまう。しかし、66％という半数以上のものが自分なりにやってみることができたと回答していることを評価したい。また、４日間の観察実習ではあったが、78％（56名中44名）が子どもと関わることができたと答えている。これは、学生自身が直接的な遊びなどで子どもと関わることだけではなく関わることの意味を広く理解していると推測される。それは、表６の子どもと関わることができる

かとの単純な問に、答え難いものがいることや、印象に残ることに、子どもだけでなく、保育者の子どもとの関わりに着目している様子が表れていることからも推し測ることができる（表7）。直接援助者としての保育者から多様な役割を果たす保育者への視点は、この段階では、実践の場というより事前事後指導のよるものと言えるだろう。

表7「援助者としての教師、教えながら教える保育」

項目	肯定的回答
教師の援助への理解	８９
子どもの関与方法への理解	８２
環境整備の重要性理解	９３
子どもの意思を生かして指導する姿勢	６６
子どもと積極的に関わる姿勢	７８

（%）

３.「子ども受容について」

子どもの実態や、子どもの気持ちを受け止め、かかわることにより、子どもの主体的な育ちが実現する。表８のように、子どもの気持ちを大事にして関わることについて、皆がとても良く分かっているとの自意識である。特に、受容的な存在でありたいとの姿勢表明が、96％とすべての問いの中で最も高い肯定的回答である。短大での実習指導や附属幼稚園での指導に、学生への受容的態度を意図的に取り組んできたことのもあるのではないか。

表８「子ども受容について」

項目	肯定的回答
子ども受容への理解	９１
子どもが受容を求めていることへの理解	８８
信頼関係は受容によることへの理解	８６
子どもを受容とする姿勢	９６

（%）

表９　印象に残ったこと　（自由記述）

①保者と子どもとの関わり	・泣いている子を保育者が奥の部屋に連れていった。・保育者の対応。気になる子を、叱らず保育者が側に置いたこと。・言葉掛けは魔法のよう。・教師の促しでの子どもの育ち。・泣いている子どもへの教師の対応。・教師の一人ひとりへの対応、こどもも教師への対応が違う。・障害児も同じように当番活動、教師もやってあげるのでなく「できるよう」に援助していた。
②子ども（同士の学ぶ）姿	・みんな元気。・子ども同士のトラブルでの子どもの反応・けんかの場面、授業で聴いたこと。・子どものけんか、言いたいことを言ったり、周りの子に流されたりの子が居ることが分かった。・すねたりするが、好きだからこそ同じことをすることが分かった。
③子どもとの関わり	・預かり保育子どもと関わることが出た。・子どもに優しくしてもらった。いろいろなものを子どもからもらった。・子どもへ頼んだが拒否された、試された。・また実習に行きたいと思った。

４．実習の振り返り（調査結果）と授業として取り組んだこととのかかわり

調査結果は、この時期の学生の実習としては、非常に高い学生の万美の実感が表現されているといえるだろう。特に、観察実習についての学び（表10-①）や子ども理解（受容的かかわり）、この実習がその後実習や、保育者生活につながるものであることが意識され、自己変革を意識していることは、事前事後指導が有効に作用していると考えられる。それは、指導内容に即した学びが、調査の中で表現されていることからも言える。

表 10　体験のアピール - 特に伝えたいこと（自由記述）

①観察実習を学んだ	・観察することの良さがわかった。（保育者と子どもの関わりの姿、言葉がけ）・観察のみの実習の良さ。客観的に観察することの貴重さを学んだ。・メモを取ることも大事だけれど、それに気をとられていると良い場面を見逃してしまう。（３）・観察のポイントや疑問を持って望むことが大切だとわかった。記録の大切さ、難しさを感じた。（２）もっと一人ひとりの子どもを良く観察して書き留めれば良かった。
②体験を通して意識が変わった	・子どもという存在を考え直すことができた。・とても良い体験だった。（子どもとの接し方が学ぶことができた。子どもの考えを少し理解できたほか、年齢のイメージや発達段階をはっきりさせることができた。子どもの姿はすごいなあと感動した。）（５）・生まれる喜びを経験した思い・障害児への見方、感じ方が変わった。ことに自分でも驚いている
③保育者への関心	・子どもへの対応は一人一人違ってむずかしい。・子どもの観察も大切だが、保育者の観察も大切だと思った。・保育者に道を進もうという気持ちが強くなった。
④その他	・実習により授業の理解度が深まった気がした。・４日間じゃ短い。

まとめ

体験的学びである実習が、より有効に学生に提供されることを願って、課題設定と検討を行ってきた。これまでの検討の中から以下の仮説を得ることができたと考える。

１、附属幼稚における実習を熟知した教員による、短期大学部の授業としての取り組みは、学生の実習参加意欲に良い影響を与えたと考えられる。

２、観察実習の意味理解が高まることにより、学生の保育理解や子ども理解が広がる。

３、学生個々への丁寧な情的なかかわりにより、学生の実習を通しての自己変革意識を促すことができる。

ただし、限定的な検討になってしまった。１．本稿では、附属幼稚園担当者の役割は含めていない。２．一昨年日誌を選択して取りまとめた学生と今回の学生は異なる。３．授業への反映について、指導内容が、すべての学生共通の対応にはなり得なかった。

検討の過程で、新たな課題を得た。それは、このような附属幼稚園の実態と、学生の実態に沿った実習の検討と短期大学部の教育課程との関連である。具体的には、学生の教育内容とその一部である事前事後指導の分担及び担当者の問題である。

今後は、新たな課題も含め、本研究の原点である学生の実感の伴った学びについて、幼稚園の担当者を含めて学生への対応の実際を分析する研究を予定している。

参考文献

大滝まり子・小田進一：幼児教育学科学生の初期実習　北海道文教短期大学研究紀要第23号　1999

髙橋雅子・小田進一：附属幼稚園実習野の可能性　北海道文教短期大学研究紀要第31号　2007

河邊貴子他：保育・教育実習　同文書院2006

秋田喜代美他：教師の様々な役割　チャイルド社　2001

相良敦子著:ママ、ひとりでするのを手伝ってね！　講談社1985

相良敦子・池田政純・則子著：子どもは動きながら学ぶ　環境による教育のポイント　講談社　1990

Ｅ・Ｍ・スタンディング著クラウス・ルーメル監
修佐藤幸江訳：モンテソーリの発見　エンデル
レ書店1975

（2009年１月15日受稿）

資料

附属幼稚園実習についての調査

附属幼稚園実習における実習を、学生の実態や意識に応じて改善していくための研究を行っています。そのためのアンケートですのでご協力お願いします。回答された内容については調査研究にのみ使用します。また取り扱いには十分留意し、その内容について一切の不利益を受けることはありませんので率直に記入ください。

問１　４日間の附属幼稚園における実習は「観察実習」でした

（１）何を観察するのか、観察実習の意味が　①良く分かった　②分らなかった

（２）記録の取り方、日誌の記入が　①良く分かった　②分らなかった

（３）どのように観察して学ぶのか、観察のポイントが　①良く分かった　②分らなかった

（４）観察することで喜びを　①感じた　②感じなかった

（４- ２）①感じた　の場合は、以下に具体的にお書きください

（５）感動的な場面に　①出会った　②出会わなかった

（５- ２）①出会った　の場合は、以下に具体的にお書きください

問２　援助者としての教師、教えながら教える保育について

（６）教師は、子どもの援助をしていることに気がついた。　①良く分かった　②分らなかった

（７）教師は、子どもが失敗しても叱るのではなくわかりやすく教えていた。
①良く分かった　②分らなかった

（８）　教師の仕事は、掃除などの環境整備が大事だと　①良く分かった　②分らなかった

（９）「できない」時に、ただやってあげるのではなく教えることが
①できた　②できなかった

(10)　子どもと関わることができた　①できた　②できなかった

(11) 印象に残ることがあれば具体的にお書きください。

問３　子どもの気持ちを受け止めることの大事さについて

(12) 子ども一人ひとりの気持ちを受け止める難しさを　①良く分かった　②分らなかった

(13) 子供は自分を受け入れてくれる人のことを求めていることが
①良く分かった　②分らなかった

(14) 子どもとの信頼関係は、保育者に受け入れられてできるということが
①良く分かった　②分らなかった

(15) 子どもの気持ちを全て受け止め、受け入れる人になりたいと思った
①思った　②思わなかった

問４　４日間の実習を通して

(16) 実習体験を経て特に伝えたいことがあれば、以下にお書きください。